

リンゴ紫紋羽病に対する 「Mark」台木の耐病性

福島県果樹試験場病理昆虫部
平成14年度試験研究成績書

1 部門名

果樹－リンゴ－病害虫防除
分類コード 04－01－23000000

2 担当者

佐々木正剛・菅野英二

3 要旨

場内コンクリート枠隔離ほ場および農業短期大学校ほ場において、「Mark」台木の紫紋羽病菌に対する耐病性について検討した。

- (1) 場内コンクリート枠隔離ほ場において、紫紋羽病菌の病原力の異なる福島市松川町金沢の一般ほ場(病原力中程度)と場内栽培部ほ場(同弱い)から採集した土壌を充填し、1994年12月に「つがる」/Mark、「つがる」/M.26(対照)の1年生苗を定植した。また、矢吹町の農業短期大学校ほ場(病原力強い)では、1993年3月に「陽光」/「Mark」、「陽光」/「M.26」(対照)の1年生苗を定植した。
- (2) 場内コンクリート枠隔離ほ場では、松川土壌の「Mark」、「M.26」とも定植1年後に発病が確認された。その後、「M.26」では発病が増加し、供試樹の75%に発生がみられ、2002年までに3樹が枯死した。「Mark」では供試樹の25%に発生がみられ、2002年までに1樹が枯死した。一方、場内土壌では、松川土壌に比べると発病比率は小さく、大差はなかった(発病樹率:「M.26」=40%、「Mark」=30%)。したがって「Mark」は「M.26」より本病にやや強いと考えられるが、実用性には疑問が持たれた。
- (3) 農業短期大学校ほ場では、「Mark」は1999年に発病が確認され、2002年までに3樹が発病した。「M.26」は2000年の調査で1樹のみ発病が確認されたが、その後は増加することなく経過した。
- (4) 以上の結果から、「Mark」は「M.26」より紫紋羽病菌に罹病しにくい傾向が認められるものの、耐病性台木としての実用性は低いと判断される。

4 その他の資料等

なし